

Café bohemia

Motoharu Sano Official Fan Association since 1986

<http://mofa.moto.co.jp/> 2015 春 Vol.136



Café bohemia Vol.136

編集長: 大山貴
副編集長: 山田和弘
編集: 奥山千亜紀 小林史明 矢島一朗
編集協力: MFMP
デザイン: コヤママサシ
印刷: 高千穂印刷(株)
ファンクラブマネージメント: 有限会社カミングスター

監修: 佐野元春

Café bohemia Vol.136 April / 2015
発行: mofa 〒150-8691 東京都渋谷区私書箱76号
編集: カフェボヘミア編集部 tel.03-5469-0922

<http://mofa.moto.co.jp/>

Café bohemiaに掲載された記事を許可なく転載することを禁止いたします。
2015 © M's Factory Music Publishers Inc. All rights reserved.

mofa



2015年の誕生日に

mofa メンバーのみなさんに

今年もたくさんのお祝いのメッセージをありがとう。

ついさきほどまで、恵比寿リキッドルームで、35周年キックオフ・イベントをやっていました。
会場にいらしたみなさん、どうもありがとう。

この模様は映像に記録しました。
来られなかった mofa メンバーのみなさんにもみていただけるよう、後に動画で公開したいと思います。
ぜひ、楽しみに待っていてください。

今年は活動 35 周年目ということでいっそう活発に動きます。
ライブで、レコードで、またみなさんと会えるのを楽しみにしています。

35年。これまで、僕の調子がいい時も、そうでない時も、
ファンのみなさんの変わらぬ支援に支えられてきました。

ロックンロールが、ただの気晴らしの音楽だったとしたら、こんなにも僕は夢中にならなかった。

ロックンロールには楽しみ以上の何かがあると、そう気づいてここまでやってきました。

自分や自分に関わるひとたちにとって意味のある曲。
そんな曲をこれからも書いていきたい、そう思っています。

これまでの応援をどうもありがとう。

これからもよろしくお願いします。

59 回目の誕生日に寄せて

佐野元春

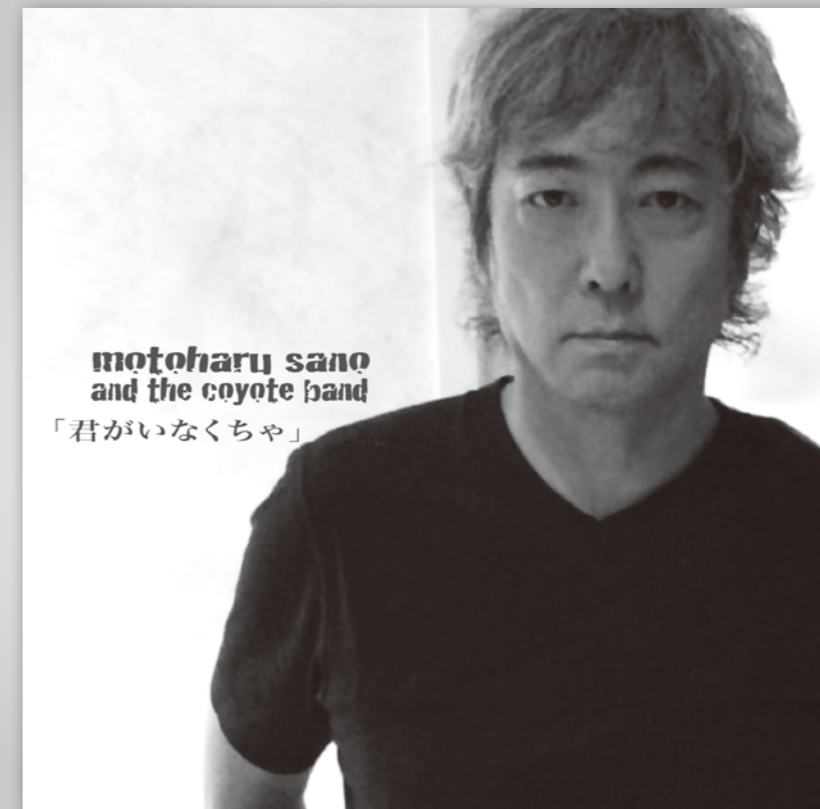


35 周年アニバーサリーソング

「君がいなくちゃ」

佐野元春 & THE COYOTE BAND

2015 年 3 月 4 日 On iTunes Store



「君がいなくちゃ」ライナーノーツ
2015 年 3 月 1 日 DaisyMusic

今年 2015 年、デビュー 35 周年を迎えた佐野元春。そのアニバーサリー・イヤーの幕開けとなる新曲「君がいなくちゃ」のリリースが決まった。これまでの、そしてこれからのファンに捧げた記念すべき一曲だ。

「君がいなくちゃ...」という印象的なフレイクが魅力的なラブ・ソングで、思わずくちずさみたくなるような極上のメロディをもったポップ・チューンだ。

昨年 2014 年の全国ツアーでいち早く披露され、ファンの間では強くレコード化が待望されていた曲でもある。

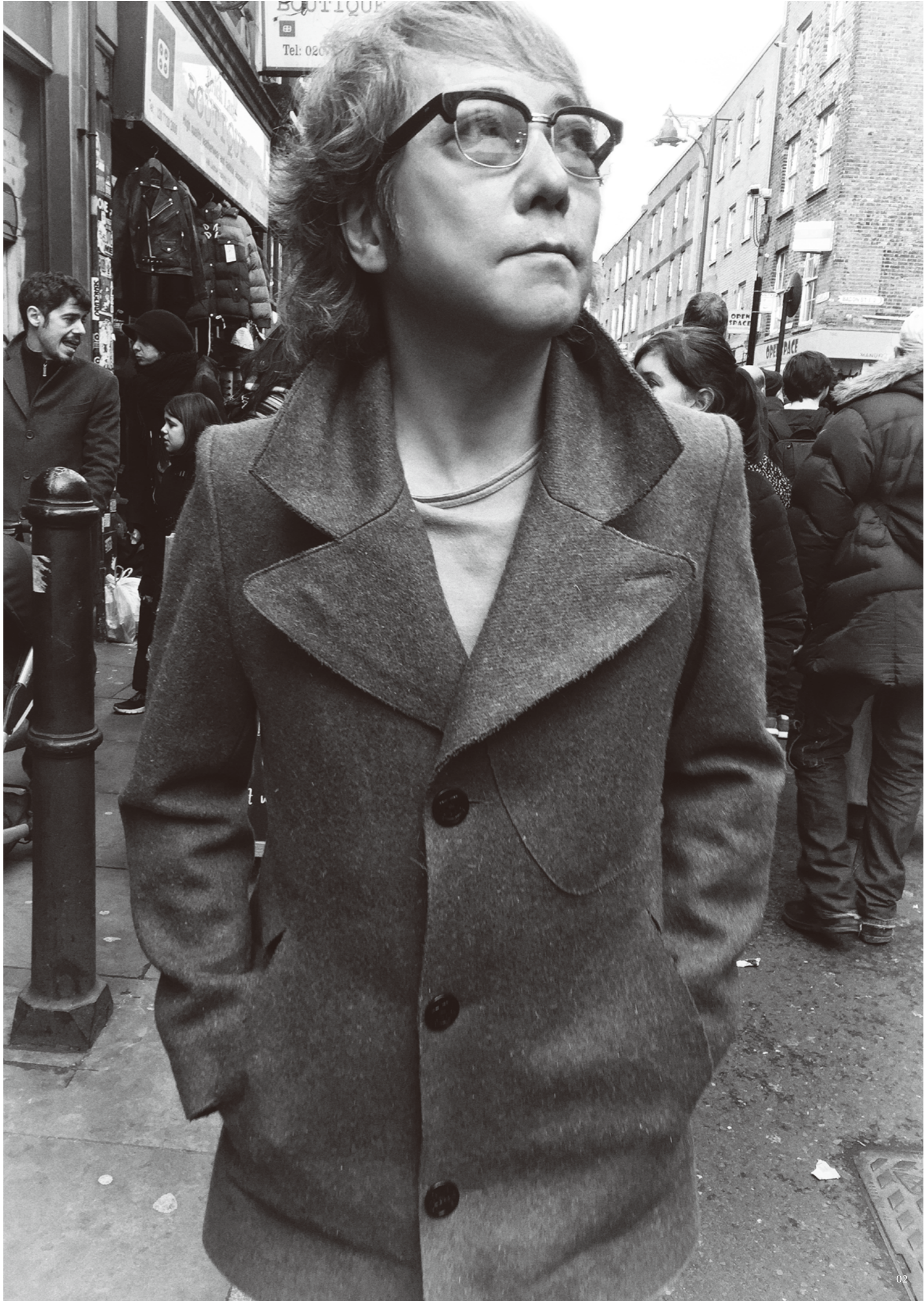
この曲には素敵なエピソードがある。実は佐野元春がこの曲を書いたのは 16 歳の頃。元春が通っていた立教高校の学生寮でまたたくまに大ヒット。曲のコピーを希望する声が続出したという。時を経て、この曲を故郷に持ち帰った学生が地元メディアで紹介、期せずしてこの曲「君がいなくちゃ」は、ちょっとしたローカル・ヒットになったということだ。

時と場所を超えて歌い継がれる伝承歌 = フォークソングのように、この曲「君がいなくちゃ」は、誰かに歌い継ぎたいような不思議な魅力があるのかもしれない。

2015 年 3 月 12 日には、東京恵比寿リキッドルームで、デビュー 35 周年を記念したキックオフ・イベントが開催される。このイベントの来場者全員に、最新シングル「君がいなくちゃ」のパッケージ用アートワークがプレゼントされる。

現在、佐野とバンドは、スタジオで新作アルバムのためのレコーディングに取り組んでいる。佐野いわく、「COYOTE」「ZOOEY」のサウンドを発展的に継いだキャリア最高のアルバムになるだろう、とのこと。新作アルバムの発表は初夏に予定されている。

新作アルバムに先がけて、佐野元春 & ザ・コヨーテバンドの新曲「君がいなくちゃ」。全世代に贈る、普遍的な愛の唄の完成です。お楽しみください。



新作「BLOOD MOON」。 僕の中では「コヨーテ」三部作の完結編という位置付けとなる。

2015年3月18日 インタビュー・文／Cb編集部

ロンドンの印象？街というのは行くたびに表情を変えていくなあという感じ。

ー 公式フェイスブックにて、バレンタインデーをロンドンで過ごされたとの記事がありました。まずこの点からお話いただけますか？

元春： 久しぶりに行きましたね、ロンドン。80年代においては、「カフェ・ボヘミア」「ナポレオンフィッシュと泳ぐ日」「TIME OUT」といったアルバム制作でロンドンにはよく行っていました。このところテレビの取材などもあって、ニューヨークに行く機会が多かったんだけど、僕にとってはもう一つの制作の現場であるロンドンに行ってみたいなと、急に思い立って行きました。旅の目的は二つ。一つは、今レコーディング中、新作アルバムのフロントカバー・アートをロンドンのあるグラフィック

制作チームに依頼しに行くこと。もう一つは、「ナポレオンフィッシュと泳ぐ日」のレコーディング・プロデューサーだったコリン・フェアリーに再会すること。実際、新作のフロントカバー・アートに関する打ち合わせも無事終わりましたし、コリン・フェアリーにも会えましたので、ホッと帰ってきました。

ー 久しぶりのロンドンはいかがでしたか。

元春： 久しぶりに行ったロンドンで一番印象的だったのは、オリエンタルな人たちが増えたことですね。アジア系の人たちがすごく増えたなあという印象がありました。週末もフードフェアのような催しが街のあちこちで行われていたのですが、そのうちの半分以上はアジア料理でした。80年代、90年代、00年代、ことあるごとにニューヨークに行ったりロンドンに行った

りしていましたが、行くたびに街というのは進化するんだなあ、表情を変えていくなあと感じました。

ー どのくらいの期間滞在されたのですか？

元春： 約8日間。本当はそこからパリに飛び、アフリカの方に行ったりしたかったんだけど、今、レコーディングプロジェクトの真っ最中ですので、帰らなくちゃいけないというので戻ってきました。

ー その新作アルバムですが、レコーディングは順調でしょうか。

元春： はい。新作の制作は順調に行っています。先日の恵比寿で行われた35周年アニバーサリーのキックオフ・イベントでも、みなさんに

アルバムのタイトルを公表しました。「BLOOD MOON」です。全12曲。ザ・コヨーテ・バンド（Cb）三枚目のスタジオ録音盤となります。「COYOTE」「ZOOEY」、そしてこの「BLOOD MOON」。これを僕の中では「コヨーテ三部作」と考えていて、次の作品がその完結編と位置付けています。

ー アルバムタイトルは、バンドメンバーにもお知らせしないうちにファンの前で発表したと志らべさんのブログで拝見しましたが。

元春： 何でもそうです（笑）。何でも僕の中で先に進めちゃいます。

ー 先日、新曲「君がいなくちゃ」がリリースされました。ライブのMCなどでも語られているこの曲に関するエピソードについて、今一度お

『君がいなくちゃ』は35周年のテーマソング。 これまで支援してきてくれたファンへの思いを込めた。

話いただけますか。

元春：新曲『君がいなくちゃ』をダウンローディングでリリースしました。スタッフから、アイ・チューンズ、ロック部門のチャートナンバーワンになったと聞いて、一つのプライズ、褒美をもらったような気持ちになっています。このことがさらに僕たちの今後の活動にいい影響を及ぼすだろうし、それが一番大事です。CBについては、以前のインタビューでも、結成以来最初のクリエイティブのピークに来ているのではないかと言いました。それを証明するような一つのことであるし、そのことをファンが喜んでくれているといいなと思います。

元春：最近では僕が話すよりインターネットの方が先になんだかんたいって尾びれ背びれがついて広がっているの、もう放っておこうっていう感じですよ。真相は僕だけしか知らない。『君がいなくちゃ』について事実関係だけを言えば、高校時代、15、16歳くらいのときに書いた曲です。立教高校に通っていたのですが、高校の中に寮があって、寮には地方から学生たちが集まっていた。その彼らがこの

『君がいなくちゃ』という曲を大変気に入って、当時はカセットテープにコピーして、手もとに持っていたという話。その寮生の何人かがそのカセットテープを故郷に持って帰って、故郷の先で誰かが唄い、メディアが取り上げた。僕はレコードを出していなかったけれども、一部の地域では『君がいなくちゃ』という曲がよく知られた曲となっていたところがある。ところが事実のようですね。

元春：音楽の普及のしかたの原点のような広がり方ですね。

元春：面白いなと思う点は、そこに商業が関わっていないということです。音楽というのは本来伝播力の強いものです。口伝えに「伝承」されていく。音楽というのは「伝播力」「伝承力」を持っているんだなという事例の一つだと思えます。そこにお金を払って宣伝しなくても、よい音楽というのは一つの伝播力を持って、人々の間に行きわたっていくんだな。これがいわゆる「フォークソング」ということです。だから、『君がいなくちゃ』という曲がそうして広まったというところは僕はずごくうれしく思います。だとしたら、この35周年というアニバーサリーにファンに還元したいと思って、この曲を正規にレコーディングしました。当然今の僕が唄うので、15歳くらいの時に書いた詩を少し手直しして、現在の世界観で唄いましたけれども、この曲のフックのところ、それから曲全体が持っている

テーマは変えずに、少し手を加えてCBと一緒に演奏してリリースした。そしてそれがチャートナンバーワンになったということから非常にうれしいです。

元春：この歌詞がちりばめられた動画(リリース・ビデオ)も特設サイトで観ることができま

元春：最近ではあれが多いんです。プロモーション・クリップで役者を使っていると高くついたりしますから(笑)。とは言っても、今、シングル曲のみならず、音楽の広まり方を見ていくと、ユー・チューブで動画を観て、曲を知る、曲の魅力を知る、そこからその曲が広がりを生じていくという例が非常に多くなってきている。昔はテレビでプロモーションムービーを観て、テレビから広がっていた。その前はラジオで聴いてラジオから広がっていた。時代時代によって、その曲が広まるプラットフォームがどこかというのは変わってくるんだけど、今はユー・チューブということだね。それはレール運営の視点からいって無視できない。この状況で僕はユー・モアとアイデアを生かした、インディペンデント精神で何か映像を作りたいと考えた。そこで注目したのがリリック・ムービー。もともと僕の楽曲は僕自身、歌詞を重要なものと捉えている。そうしたソングライタータイプの曲ですから、あのリリック・ムービーというものは観ている人たちに何かアピールするも

があるだろうと、そう思って30分で作りました。だから観ていただいで楽しんでくれればいいんですけど、あれを30分で作ったというところに驚きをもってほしいですね(笑)。

元春：これはアルバム先行シングルとは捉えていなくて、僕の中では35周年アニバーサリーのテーマソング、みんなと分かち合うものと捉えています。ですので、次の新作の「BLOOD MOON」には収録しない。

元春：『イノセント』も20周年アニバーサリーのテーマソング、ファンのみんなと分かち合うものだった。あの曲の中にも、それまで支援してきてくれたファンへの思いも込めましたし、今回もまた同様に『君がいなくちゃ』という曲の中に、これまで支援してきてくれたファンへの思いというのを込めました。

元春：『君がいなくちゃ』は35周年のテーマソングとして、今後いろいろところで聴けることになるわけですね。

元春：はい、楽しんでくれればうれしいです。





ー 続いて、CBのメンバーとしてライブ、レコーディング等の活動をともにする渡辺シユンスケさん、またCBメンバーと同世代のミュージシャンである堂島孝平さんのライブへのゲスト出演についてお聞きします。

元春： 特定のアーティストのライブにゲスト出演するというのは、僕の中ではそう多くないですね。だから珍しいこととして捉えてほしいんだけど、渡辺シユンスケ君はCBの中ではキーボーディストで、素晴らしい才能を僕たちに見せてくれる。プレイヤーとしてだけではなく、彼はよいソングライターでもあるし、シンガーでもある。ときどき彼が自分で作った曲を聴かせてもらっただけでも、それを聴けばよくわかる。その渡辺シユンスケ君が生誕40年を記念して大掛かりなワンマンショウ・ライブをやりました。話は前から聞いていたんだけど、そのイベントの直前になって、「佐野さん、出てもらえませんか」とオファーがあった。もう僕は喜んでね、「もちろん出るよ、何をすればいいのか」って聞いたら、「約束の橋」を唄ってほしい。僕たちバンドできちんと演奏できるようにしましたから」って。それは心強いねって言って、それで当日、気持ちよく僕は『約束の橋』を唄ったんです。そのときに彼のライブをはじめから終わりまで観ていたけれども、すごく才能のあるソングライターであり、サウンドクリエイターであり、キーボードプレイヤーだなと僕は思いました。今、シユ

ローダーヘッズの名義でレコードを出してライブをやっていますけれども、今年はずいぶん彼のソングライターとしての魅力、ファンに楽しんでもらえたらいいなと思っています。本人が優れたキーボードプレイヤーだけに、いろいろなバンドからバックギンゲセッションしてくれとすごく忙しくしているんですけども、少し彼にモチベーションを持ってもらって、自分の曲をレコーディングするな

らいつでも手伝うよ、と言っています。それと同様に、もうすでにレコーディング、アーティストとして成功している堂島孝平君、彼もデビュー20周年のアニバーサリー・ライブがあり、それに出てくれないかというオファーがあったので、こちらも喜んで出演して『SOMEDAY』を唄いました。堂島君も優れたメロディメーカーです。日本だとなかなかメロディメーカーが注目されないという傾向があると僕は思ったんだけど、僕は上の世代から見てもあしたよいメロディを書く才能を大事にしたいなと思っています。そしてまた、堂島君も僕の音楽をずっと聴いてきてくれたということなので、そうした彼とのステージ上でのコラボレーションはもちろん楽しかったし、渡辺シユンスケ君同様、彼らのキャリアを更新していこうとする上に僕の力が必要だったから力を貸していきたいと思っています。

受け継ぐもの、受け継がれるもの、伝統。日本で一番欠けているのはそこだ。

ー 堂島さんとはことある度に何度も共演されていますね。

元春： 「SOMEDAY」名盤ライブのときにもバックギンゲコーラスで参加してくれました。

彼ら二人に限らず、CB全員、やはりよい詩を書きますし、よい曲を書いてよい演奏をする。スーパーグループですからね。昔で言うと、バッファロー・スプリングフィールドやビートルズと同じような質を持った、日本で一番のパンドだと僕は思っている。そのCB一人ひとりのメンバーのソロキャリアを拡大していく、その手伝いが僕なりにできたらいいなと、具体的に形にしていこうということを今考え始めています。それは僕が「ナイアガラトライアングル vol.1,2」で大瀧詠一さんから教えてもらったことだよ。あのときの大瀧さんのやり方というのは、僕と杉真理くんと大瀧さんがそれぞれ曲を何曲かず持ち寄って一枚のアルバムとして完結してパッケージ化した。僕はそのやり方を応用できているんです。ですからCBメンバーそれぞれが曲を持ち寄り演奏はCBがやる、監修、プロデューサーは僕がやるということであれば、すごく理に適った、ファンにとっても腑に落ちるよいアルバムができるかなという夢を持っています。

ー まさに、佐野さんの曲をずっと聴いて育ってきた世代の彼らが、佐野さんを慕って声をかけてくるというのは、どんなふうに感じますか。

元春： 僕は繋がりたいと思うんです。率直に一緒に唄ってほしいと言われれば喜んで唄いますし、音楽というのは表現ですから、同じ種類のいわゆる同じ性格を持ったソングライターであったり、バンドであったりすると、やはりそこには自分の音楽との共通性を見出すわけです。何が共通するのかな、共通しているということはどういう意味なのか。僕はいつかライブで強調して言っていましたけれども、受け継いでいく、受け継がれていく、この精神というのは意識的にきちんとやっていかないと、機能していかないものだと思います。ただ言葉だけで尊敬していますとか、下の世代の何かを褒めるだけじゃなくて、それを形にしていって、そしてその精神の繋がりとはいかにいうことを自分たちでよく理解していく、その意味についてよく考える。それが大きな意味で言えば伝統というところに繋がっていくんだと思っています。今日本では一番欠けているところはそこだ。継承していくものについてあまりにも無意識すぎる。各世代でいろいろなことが完結してしまっただけで、分断している。これでは先によいことは起こらない。だから僕は自分の周りに、小さな繋がりがもしないけれども、受け継ぐもの、受け継いでいくもの、伝統とは何か、そこを小さい単位であるけれども、実践していく、

「ナイアガラトライアングル」の大瀧さんのやり方、僕は応用できると思っている。

僕のロックンロールクラシック、ザ・ニューヨーク・バンドの演奏で新たな血液が巡ってくる。それをツアーで証明したい。

形にしてそれをファンに見せていきたいと思っ
ている。

― それは少し前の活動で言えば、雪村いづみ
さんとの共演であるかもしれませんが……

元春： 雪村さんとの共演もそうだし、大滝さん
から受けたものに対する恩返しかもしれない。

**後輩とのコラボレーション「思い巡って
もらいた」は90年代の「H.I.S.」。**

― 後輩とのコラボレーションということでは、
先日の35周年キックオフではCBメンバーのア
ルバムのプロデュースも考えたいという話があ
りました。

元春： そこから先について、僕の活動を振り
返ってほしいのは、90年代に僕は「H.I.
S」というタイトルでレーベルを超えたその
時代のニュー・アーティストを集めて、赤坂
BLITZでライブをやった。いわゆる僕がっ
くった簡単なロックフェスだったと思うんだよ
ね。佐野元春がプロデュースするロックフェス。
あれは三年間続けてやりましたけれども、そこ
から本当に多くのバンドやソングライターたち
が独自の活動で自分を築いていった。その彼ら
をはじめとして、あの時代に音楽をつくり始め
てキャリアを始めて、今でもよい音楽をつくり
続けている世代という、30代後半、40代、50

代に差し掛かる人もいる。ただその彼らは残念
なことに、今あまり聴かれるチャンスを持って
いない。ラジオ番組も取り上げない、レコード
を出すんだけれどもそれを欲している人のと
ころになかなか届かない。これはがっかりする
状況というよりは、構造的に欠陥がある。欠
陥だから、その欠陥を直せば欠陥じゃなくなる
と僕は思っている。たまたま今、時代的にそう
いうところに直面している優れたアーティスト
はすごく多い。僕よりだいたいワン・ディケイ
ド

下の、僕の音楽を多感な頃に聴いてきた世代の
表現者。彼らは今でも果敢により表現を続けて
いる。こういう音楽や詩、演奏を求めている人
たちも少なからずいることを知っている。ただ
それが線で結ばれていないというところに構造
的な欠陥があると思う。ここに水が流れていな
い状態なので、何かの方法を使って水が流れ普
通の状態になったらいいな、そこに僕が何か貢
献できたらいいな、それが僕のできるることかな
と常々思っています。例えばテレビで「ザ・ソ
ングライターズ」をやり、あの番組で僕の先輩や後
輩たちを、ソングライティングとは何かという
テーマのもとに束ねたのと同じように。今、構造
的におかしなことになっている、動脈硬化を起
こしているみたいな感じですから、そこに医者
となつて……。僕が医者だったらあまり倫理観を
持っていないでしょうね(笑)。僕は、この善
し悪しで物事を判断しませんから、この前(35周
年アニバーサリー)のキックオフ・イベント)も
言った通り、「粋」か「野暮」かで判断するから。

粋か野暮で判断する医者になっていると思う。
そうすると倫理から大きく外れちゃうこともあ
るかもしれないね。手塚治虫さんが描いたドク
ター、ブラック・ジャックのように……。そんな感
じでやっていきたいと思っています。

**素敵なことはここから始まるよ、とい
う気持ちを含めて『誰かが君のドアを
叩いている』。**

― 先日恵比寿で行われた35周年アニバーサ
リーのキックオフ・イベントについてお聞きし
ます。第一部のライブはこれまでCBの演奏で
は聴いたことのない曲も多くファンとしてう
れしい内容でした。どんな基準で選ばれたの
ですか。

元春： 『誰かが君のドアを叩いている』『ポップ
チルドレン』『国のための準備』、ここから始まっ
たことに注目してほしい。35周年が始まるよっ
ていう、そういう主旨のイベントでしたからそ
れにふさわしい曲をということ、僕が選んだ
のは『誰かが君のドアを叩いている』。素敵なこと
はまだ訪れちゃいない、ここから始まるよ、と
いうような気持ちも込めた。『ポップチルドレ
ン』に関しては、僕の中のちょっと気のきいた
ロックンロール曲としてザ・ハートランド(H
L)も演奏してきたし、ザ・ホーボーキング・パ
ンド(HKB)も独自のアレンジで演奏してき
た。考えてみるとCBとはまだやってないなど

いうことに気づいて、僕の中のロックンロール
クラシック、これをCBでやるとどうなるかと
いうところをみんなに聴いてもらいました。
『国のための準備』というのは今唄うにはいい
んじゃないかなと思って選んだ。あとはCBの
定番の曲『夜空の果てまで』『ポーラスタア』
と、新曲をはさんで、最初シングルを切ったと
きは緩やかな広がりを持ちましたけれども、あ
るときから爆発的に多くの人たちに知られる
ことになった『ラ・ウィータ・エ・ベラ』。現在
のCBを表現するのにピッタリの選曲だった
と思う、そこで縮めた。オールスタンディング
だったので、もうちょっと演奏しなかったんだ
けれどみんなの腰と足を考えて(笑)こ
のへんで切り上げて第二部に行った方がいい
なという判断がありました。

― 『ポップチルドレン』のアレンジやコーラ
スも新鮮な感じで非常に素晴らしかったです。
元春： そうですね。HL、HKBとも違う、まさ
に初めからCBの持ち歌だったかのような演奏
だったと思います。そのように僕のロックンロー
ルクラシックが新たにCBによって演奏され血
液が巡ってくる。こういうことを今年から来年に
かけてのツアーで次々に証明していきたいなど
思っています。

― クラシック曲が新たなアレンジでよみがえ
る、佐野元春ライブの真髓という感じがします。
元春： フアンから教えてもらいました。やは
り落語界でも音楽界でも、どこでもそうだと
思いますが、新世代がどんどん出てくるという
感じですね。僕にとつて喃家さんという、例えば
志ん生であったり、僕よりずっと年上の経験を
持ったおじさんだったりおじいさんが面白い話
をしてくれるという、そのような経験者という
イメージがあった。でも僕も年齢を経てくれれば
当然下の世代の落語家さんもたくさん出てくる
わけで、その人たちはいろいろな文化に触れて
いる。ロックンロール、ポップ音楽、映画、そう
した表現にも興味を持って、その中で落語を展
開するという人も増えてきている。志らべさん
もそのうちの一人ではないでしょうか。非常に
音楽に詳しいですし、その音楽的な知識を古典
落語の中に、あるいは自分の新作落語の中に盛
り込んでいく。僕からすれば落語界の新世代
だなと思っています。



**僕は今まで他人のやらないことをやっ
ている。**

― 第一部のMCでは第二部での落語を意識
されたのか「隠居さん」というキーワードが
出ていました。

元春： そうだね。僕は今まで他人のやらない
ことをやって、それを形にして面白くなってみ
んなに思ってもらって、その後からそれを真似
する人がたくさん出てくるという歴史の中で生
きてきています。今回もロックンロールと落語
を一つのショウの中で並べられるのだからか
と買った人もいるかもしれない。僕は大丈夫だ
と構想してみたんだけど、かと思
ったので構成してみたんだけど、急に
必要だろうと思った。そこで『国のための準備』
という曲を唄う前に気分的に第二部に繋がって
いく枕としての話をしました。下町にはご隠居
がいる、ご隠居とは経験者である、僕は経験者の

ところいつも相談しに行っていた。最近では
『国が戦争を始められる状態にしていって指
導者が言っているんだけど、ご隠居さん、ど
う思いますか?』って。そうしたら怒られてし
まった。「お前は自分のための準備もできてい
ないのに、『国のための準備』なんて言ってる
ねえだろ」って言うから曲が始まる。落語の様
式です。拙いけれども僕の方で振っておいて、何
かそういう雰囲気の中で第二部に繋がっていく
という僕の親切心というか、そういうものがあり
ました。みんなが自然に楽しんでくれればいい
と思つて、日夜工夫しています。

― 第二部で落語と司会を務めた立川志らべ
さんは佐野さんが探してきたのでしょうか?

元春： フアンから教えてもらいました。やは
り落語界でも音楽界でも、どこでもそうだと
思いますが、新世代がどんどん出てくるという
感じですね。僕にとつて喃家さんという、例えば
志ん生であったり、僕よりずっと年上の経験を
持ったおじさんだったりおじいさんが面白い話
をしてくれるという、そのような経験者という
イメージがあった。でも僕も年齢を経てくれれば
当然下の世代の落語家さんもたくさん出てくる
わけで、その人たちはいろいろな文化に触れて
いる。ロックンロール、ポップ音楽、映画、そう
した表現にも興味を持って、その中で落語を展
開するという人も増えてきている。志らべさん
もそのうちの一人ではないでしょうか。非常に
音楽に詳しいですし、その音楽的な知識を古典
落語の中に、あるいは自分の新作落語の中に盛
り込んでいく。僕からすれば落語界の新世代
だなと思っています。

― 志らべさんという人がいるので第二部は



殿様が僕になった「初音の鼓」、観客が大笑いしていたのでこれでOKだなど(笑)。

落語をまじえたトークショウにしようと考えられたのですか？

元春： 35周年アニバーサリーのキックオフイベントということで、いろいろなことを考えたんです。米国のジミー・ファロンのショウのパロディのようなものしようかなとかいろいろなアイデアを出したんだけど、ただパロディするのではなくて、日本の文化にも目を向けてみようといったところで僕の視野に入ってきたのが落語というジャンルでした。囃家さんの中にも僕のファンがたくさんいるということなので、その囃家さんに頼んで僕のファンが楽しんでくれればいいなというところから、あの「第一部」運びになりました。

— トークショウの前に志らべさんが披露した囃はご存知でしたか？

元春： あれは古典落語でした。「初音の鼓」という古典落語をベースにして、殿様を僕にして、その中に僕の楽曲を練り込んでいくという、すごく高度な技術でまとめ上げていました。僕は舞台袖で聴いていたんですけども、たいしたもんだなと思いました。とにかく観ている人がゲラゲラ大笑いしていましたから(笑)、これでOKだと思いました。

今のCBは音楽ファンと自称する人なら全員観ておいた方がいいと思う。

— 第一部では驚くほどいろいろな予定が発表されました。

元春： やはり周年期ということで、できるだけいろいろな街に出かけて僕は元気だよというところを見せたい。まずは東京、大阪でのビルボードライブ「スモーク・アンド・ブルー」というタイトルでやってきたもので、これで三回目です。普段のホールコンサートではあまり演れないような曲を集め、それをビルボードという空間に合わせた新しい編曲でみなさんに楽しんでもらう。これはとても好評でビルボードからもファンからも、また続けてやってくださいというオファーがあったので、4月、5月、6月と3ヶ月連続で東京、大阪でやります。当然一回目、二回目とはなるべく曲が被らないように工夫したいなと思っっています。その後は夏が近くなってくる、日本でも野外ロックフェスが定着してきて本当にたくさんフェスがあります。今年は35周年ということでプロモーターからもぜひ出てくれとオファーが相次いでいますので、僕のファンだけではなくロックフェスに集まる音楽ファンにも僕たちの音楽演奏を聴いてもらいたいということで、積極的に野外フェスに出ます。その後は、主要都市から少し離れた地方都市にもちゃんとしたライブハウスがたくさんできていますので、そこに出かけて行って地元音楽ファンと楽しい時間を過ごしたい。それが終わると、たぶん12月中旬以降から来年3月までになりますけれども、いよいよよ全国主要都市でのホールツアーと

なります。

ビルボードから始まり、野外ロックフェス、ライブハウスツアー、ホールツアー、これらでできるだけ多くの街で演奏して、これら全部をひっくめて僕の35周年のコンサート活動にしようかなと思っっています。もちろん、ビルボードでのライブはHKBです。実を言うとこれからはサルが始めるのだけれども、久しぶりにHKBの連中とセッションできるので、すごく楽しみにしている。他のロックフェスやライブハウス、ホールツアーはCBです。バンドもノリにノッている時です。今のCBは音楽ファンと自称する人がいたら全員観ておいた方がいいと僕は思います。その時から何かが変わりますから。

— ビルボードとライブハウスツアーの間に新作アルバムが出るということでしょうか。

元春： そうですね。だいたい初夏。6月7月くらいに焦点を当てています。すでにこの時点(この号の取材時)でミックスタウンも7、8割くらい進んでいる。この後、マスタリングとアルバムパッケージの制作という大きな仕事が続いていく。だから首尾よくいけば4月5月くらいにはパッケージは完成するので、そこから流通に乗せるとなると、やはり6月7月、何かの都合ですれ込んだとしても9月。8月はみんな外に行って遊んでいますから(笑)、レコードなんて見向きもしない月なので、そこからみんな戻ってきたり9月、いろんなことがあってセンチになってい

る9月にボンと出してもいいのかなと。もう少し経てば何月リリースだよと明言できると思います。今ちょうど見極めてるところです。

— 以前はアルバムが出るとそれを冠したツアーが行われることが多かったですが、ライブハウスツアーはそのような位置付けのものですか？

元春： 僕は新作アルバムとツアーの関連はあまりタイトに考えないことにしています。演る曲はいっぱいありますから。僕が基本的に思うのは、ライブハウスなりホールなりに集まってきてくれたみんなが聴きたい曲、それをたっぷり演奏して楽しい時間を過ごす。これが僕の主義です。もちろん、クラシックがいいなというのであればそれを演奏しつつ、僕のクラシックのこの曲が好きなら新しく書いたこの曲もきつと気に入ってもらえるかも、と僕の方から新しい曲を演るといったそんな感じです。確かに昔は新しいアルバムが出るとプロモーションアルバムがありましたが、あまりにも商業性が強い。アルバムを売るためにツアーをやってあげるよなんていうのは間違い。前にもインタビューで言いましたが、ミュージシャンの本懐はライブにある。僕はレコードを出さなくてもライブは続けていくし、しかし今回は35周年で素晴らしい、みんなに気に入ってもらえるよいアルバムができています。「BLOOD MOON」は僕の自信作です。コーテ三部作の完結編ですからピシッとい





アルバムになります。これは楽しみながら作りま
したけれども気合いが入っています。表現として
も今の年齢まで来ましたから、ここで何か過去に
受けたものをまた二番煎じでやるなんていうの
はもう佐野元春スタイルじゃない。常にアップ
デートして、みんながポロッと目から鱗が落ちる
ような日本語とビートの関係とか、曲調とか演奏
とか、僕自身のロックミュージシャンとしての態
度とか、そうした何か「あ、また新しい時代を更
新しているね」というところを見てもら
わないとやっぱり佐野元春らしくない。二番煎じ
をやるっていうのは一番怠惰だと思うんです。

簡単だけ怠惰。そうした意味でヨーテ体制に
入ってから、「COYOTE」、「ZOOEY」、「それ
ぞれにファンは「すごいね」「いいね」と、「新し
いね」と言ってくれた。「COYOTE」を出し
た時、みんなが喜んでくれた。そして「ZOOE
Y」。これもまたすごく革新的ないいアルバムだ
と言って今でも聴いてくれている。志らべさんも
「ZOOEY」を今でも聴いている。まだその熱
が冷めやらない中に次の新作って、心の準備がで
きていませんよ。なんてうれしいことを言ってく
れている。

僕としてはCBがバンドとして今非常によい
状態にあるので、この時期にいい曲をたくさん書
いて彼らと作品を残していく。そういうタイミン
グでの「BLOOD MOON」ですから、悪いア
ルバムになるはずがないと僕は思っている。なの
で、まずはこのアルバムをできるだけたくさん
人に聴いてもらいつつ、僕のライブにおいてはみ

なさんがライブで愛してくれた僕のクラシック
曲もたっぷり演奏する。とにかく意義がありな
がらも楽しく、みんなで前に更新していけるよ
うな、ファンやバンドや僕、みんなで時代を一歩
アップデートしていけるような、そういうライブ
ツアー、新しいレコードになったらいいなという
気持ちでいっぱいです。だから「新しいアルバム
出しましたからそのアルバムのツアーですよ」と
いう位置付けではないです。

MWS 20周年。これから先また20年果たす役割のために、未来に向けて準備しているのかな。

— 日常的なファンとのコミュニケーション
の場としてMWSがありますが、こちらも更に
充実を図られているということ、少しお話を
お聞かせください。

元春： MWSはこの3月で発足して20年を迎
える。僕はこの事実を驚異的だと思っているん
です。国内初のアーティストホームページであ
り、端からEto.co.jpって僕の個人名がド
メインになっている日本で初めてのもの。僕が
プロバイダ契約に行ったとき、I-IJでしたけ
れども、12人目のお客さんでしたからいかに早
いかですよ。恣意。しかも普通に電話して「ド
メインが欲しいんですけど」って僕の方が
言った。そうしたらI-IJのセールの人が事
務所に来まして、いろいろと説明していつてく

れました。今そんな契約の仕方なんて誰もして
いないですよ。恣意。

MWSにおいては僕だけじゃなくて、やはり
僕のファンは先進的な人が多い。そのファ
ンが集まって、インターネットという新しい技
術を使って、佐野元春の音楽を好んでいるファ
ン同士が連絡を取り合えるような、よいものを
共有できるような、そういう場を作っている。こ
うにビジョンがあったんです。そしてそのサイ
トで商業しようとか、ひと儲け企もうとか、出
会い系のサイトを作ろうとか、そんな目先のビ
ジョンなんか誰も持っていなかった。僕の音楽
を聴く者同士が、世代や国籍や性別を超えてみ
んなで繋がりが合える、まさにその後何十年か
出てきた言葉ですけれど、「SNS」(ソー
シャル・ネットワーキング・サービス)思考を最
初から持っていたチームでした。

そういう彼らが僕の音楽のファンであるとい
うことが誇りであるのと同時に、彼らが20代
の時に、僕が30代の時にMWSを始め、その時に
作ったプログラムが今でも堅牢に動いている。
そのプログラムの堅牢さというところにも僕は
驚きを持って見えています。それだけじゃなく、
その後のアーティストホームページのひな型と
なるべき様々な内容です。その内容が初めから
実現していた。例えば武道館での僕のライブを
配信したといった実績もある、それも日本初
だった。そこにあるのは、名譽心とか、それか
ら何かお金を儲けようというような気持ちが先

にあるのではなく、ファン同士みんなでもよき
のを共有したい、リンクして共有したい、この
思いが先にあつたという、そこに僕は精神の美
しさを、気高きを見る。だからMWSが20年続
いたということは、これは気高い一つの出来事
であろうと僕は言いたい。そうした精神を持っ
てファンもMWSから僕の情報を得たり、ファ
ン同士が繋がったりしましたから、その後出て
きたインターネットの新しい技術であるツイッ
ターとか、フェイスブックとか、これらはイ
ンターネットのそうした技術を使ってSNSと
いうコンセプトのもとに、ファン同士が繋が
合うのは当然のことです。

昔だったら一つのレコードを宣伝するの
も、レコード会社が本当にたくさんのお金をか
けて不特定多数の人たちに「素敵な音楽がで
きました。気に入った方は買ってください」と
いったような調子だったんだけれども、今やこ
うしたインターネット主流の時代になってくる
と、あらかじめ僕の音楽や僕の活動に関心を
持った何万人もの人たちがフェイスブックを見
てくれて、そして「僕の活動はこうです」と伝
えることができる。だからその情報が欲しい人と、
その情報を聞いてほしい側との握手する効率が
昔より高くなっている。ここに注目するべきで
す。結局、昔に戻っていつているんです。友達に
なれない奴は永遠に友達になれない。だけれど
も友達になる素養のある人たちは、どこかに友
達がいるはずだと思つて何かしらみんな結局繋
がりを持しながら人生を歩んでいつて、繋が

MWSが20年続いたとらへんじや、

これは気高い一つの出来事であるとして僕は言いたい。

35周年のしめくくりにプレゼントしたいアルバムは、 パーソナルな、僕のソロ名義のアルバム。

るとうれしいという。それがインターネットを使って若干効率的に表現できるようになっている現代である。

僕らがやっているのはその延長です。僕らのフェイスブックというのはそういう精神を持ってやっている。それを端的に表す言葉として僕がこの前のショウで言ったのは「35年間僕を友達のように扱ってくれてありがとう。おかげで寂しい思いをしなくてすみました」。象徴的に言ったのはつまりそういうことです。それとMWSは20年経ったわけですけど、これを機に中のプログラムも含めて大幅にリニューアルしたいなと思っています。これまで20年間に果たした役割というのがありますけれども、これから先また20年果たす役割というものもあるわけで、未来に向けて準備しているのかなと僕は思っています。

— 佐野さんのアイデアで変えていくということになりますか。

元春：そうですね。やっぱりみんなが求めているものというのがコアにあって、それをいかにいろいろなことをクリアして実現できるかというところが僕の方だと思えます。とかくライツ（権利関係）のなかったものがインターネットサイトにはあるわけですから、それを扱うにはいろいろと気をつけなければいけないこともあるし、何もかも楽しくできるという幼稚な世界ではないですから。ファンが求めている

のがそこにあり、それを叶えてあげるために僕の方で夜中に寝ないでやらなきゃいけないことがたくさんあるということですよ（笑）。それが僕の仕事だと思っている。アイデアはみなさんが出してくれると思っています。

「音楽詩集」これは大変。広い海に向かって泳ぎ始めたけれども、向こう側に岸が見えない。

— 書籍を刊行するというお話もありましたが。

元春：これも一つの希望ですね。できたらいいな。かねてから自分の書き連ねてきた詩は書籍にまとめられたらいいなと思ってきました。それは散文詩に限らず、音楽詩に限らず。レコードで発表した詩というのはあくまでも音楽の中の詩です。メロディやリズムの都合から、どうしてもこういう表現にしなければいけないといった都合で成り立っているところもある。実際に詩集を作ろうということであれば、そうした都合は全部外して、活字として読む詩としてまた再構成する必要があります。自分が作ったんだからそれはよくわかってる。再構成して一つのプリントされた詩として楽しめる体（てい）にリアレンジした詩集を出したらどうか。

— 以前から佐野さんの詩集が出ないかなと思っていたんです。結構な量になりますよね。

元春：そうですね。分厚いものになっちゃうんじゃないかな。作業は大変。広い海に向かって泳ぎ始めたのはいいけれども、向こう側に岸が見えないって感じ。大変な作業ではあるけれども、でもやっぱり周年なので、自分の中にモチベーションがあるんです。ここを逃したらまた5年後かみたい。普通の時だったら他のことをやっちゃうだろう。だからちよつと自分の尻を叩いて形にすることを今やっています。力尽きたらごめんさいって感じですよ（笑）。

— 音楽としての詩と活字で読むときの詩とは違うものになるものですか。

元春：若干ね。もちろん曲の詩として書いて、そのまま抽出してプリントされた詩として成立しているものもあるんです。でも、どうしてもリズムとかメロディに縛られて、その行間の中で、これは聴き手のイメージに任せてしまえと思って、表現を省略しているようなところも仮あるんだけど、その省略を省略せずに行間を埋めていくことも作者である僕だったらできるんです。ですので、音楽の中の音楽詩とそれと従来の形でプリントされて読まれる詩と僕は分けて考えています。これは、作業として僕自身も大変なだけども楽しい作業でもあります。自分がこの詩を書いた時に、行間にはどういった思いを滲ませたのかというのを、もう一度自分の中で判読するという作業なんです。いい切磋琢磨になります。

— 最後に驚きの2016年春の新作アルバム発売についてお話しいただけますか。

元春：35周年というくくりの中で、その真つ最中に新作アルバムを出して、その35周年のお祝いの最後にまたファンに感謝を込めて新作アルバムを出すという、これはやって見たかったことですね。それで今回、曲もほとんどできてきているのでやってみようと、そう思って今着々と準備を進めているところです。次に出る「BLOOD MOON」というのはCBとの完璧なロックアルバムですけれども、この周年期の最後にみなさんにプレゼントしたいアルバムは、もつとパーソナルな、僕のシンガーソングライターとしての面が前面に出た、バンドアルバムというよりはソロ名義のアルバムにしたいと思っています。発表に至る途中、シングル曲としてリリースするというのも考えています。ぜひ楽しみにしてほしいです。

— 「小粋な曲」とのことですが？

元春：小粋な曲…（笑）。パーソナルな曲です。はい。

— ファン一同楽しみに待っています。本日はお忙しいところありがとうございました。



INFORMATION

* 136

ファンクラブの熱い思いをペンに、またキーボードに託して、編集部までお寄せください。

Cappuccino Talk Meeting



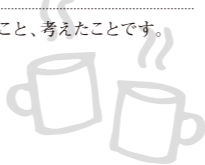
このコーナーでは毎号募集するテーマに対し、ハガキ、封書などによる従来通りの投稿を受付するのに加え、インターネット上のmofaサイトのwebCbと連動して、サイトを通じて書き込んでいただくことも可能になりました。投稿方法に関わらず、本誌次号のコーナーに掲載されるチャンスが生まれます。皆さん奮ってご参加ください。

次回読者投稿コーナー 募集内容

締切り：2015年5月29日(金)必着

今回募集するテーマは、次の3点に関する感じたこと、思ったこと、考えたことです。

1. 「Smoke & Blue 2015」、その他ライブに参加して
2. 35周年の活動の中で一番期待したいこと
3. 本誌136号の感想



<http://mofa.moto.co.jp/pc/members/fangine/ctm/index.jsp>

会員証再発行

会員証を紛失した場合は、実費+送料手数料で再発行します。郵便振替で会費口座へ500円を送金してください。

通信欄：会員番号、会員証再発行希望、電話番号をご記入ください。ご送金後、約1ヶ月で新しい会員証をお届けします。＊会員証再発行は郵便振替のみでの受付です。

クラブ継続

「mofa」オンラインサービスへアップデートされることによりオンラインによる手続きが可能です。アップデート手続きは、無料です。まだの方は、ぜひ、「mofaサイト」をご利用ください。

◎アップデート手続きはこちらから - <http://mofa.moto.co.jp/>

オンラインによるカード決済、コンビニエンスストアをご利用頂けます。従来の郵便振替による受付も今まで通り可能です。

期限切れ後3ヶ月間は継続手続きが可能ですが、その場合期限月にさかのぼっての処理ではなく入金された月からの一年間の継続となり会費未納期に出された会報、DM等は一切お送りできません。4ヶ月以上未納の場合は再入会となります。会費は期限の切れる月の20日までにmofaオンラインサービス又は郵便振替にてご送金下さい。期限切れはトラブルの原因になりやすいので充分気をつけてください。

＊ 会員期限証(受領証)は振込受領証またはカード引き落とし明細でご確認頂ける為、発行は致しませんのでご了承下さい。

＊ 会員期限は、mofaサイト・発送物宛名シールにてご確認いただけます。宛名シールの出力準備の都合上、末日に継続手続きされた方は旧期限のデータで表示されますが、手続きに不備などなければ完了しております。

郵便振替口座番号：00190-1-106838

加入者名：モウファ

送金金額：1年¥5,000

通信欄：継続希望と会員番号、電話番号

＊旧用紙でもご送金頂けますが金額にご注意下さい。

住所変更

住所、氏名が変更になる場合は、速やかに「mofa住所、氏名変更」係まで、おハガキでご通知下さい。mofaオンラインサービスをご利用の方は、フロントデスクのMOTO TVの下にあります、「メンバーシップ情報」よりご自身で登録データの変更が可能です。尚、発送物の関係上、必ず郵便局に転送届を出すのもお忘れなく。他の係宛のものに同封されますと手続きが遅れる場合がありますので、必ず別送してください。

編集後記

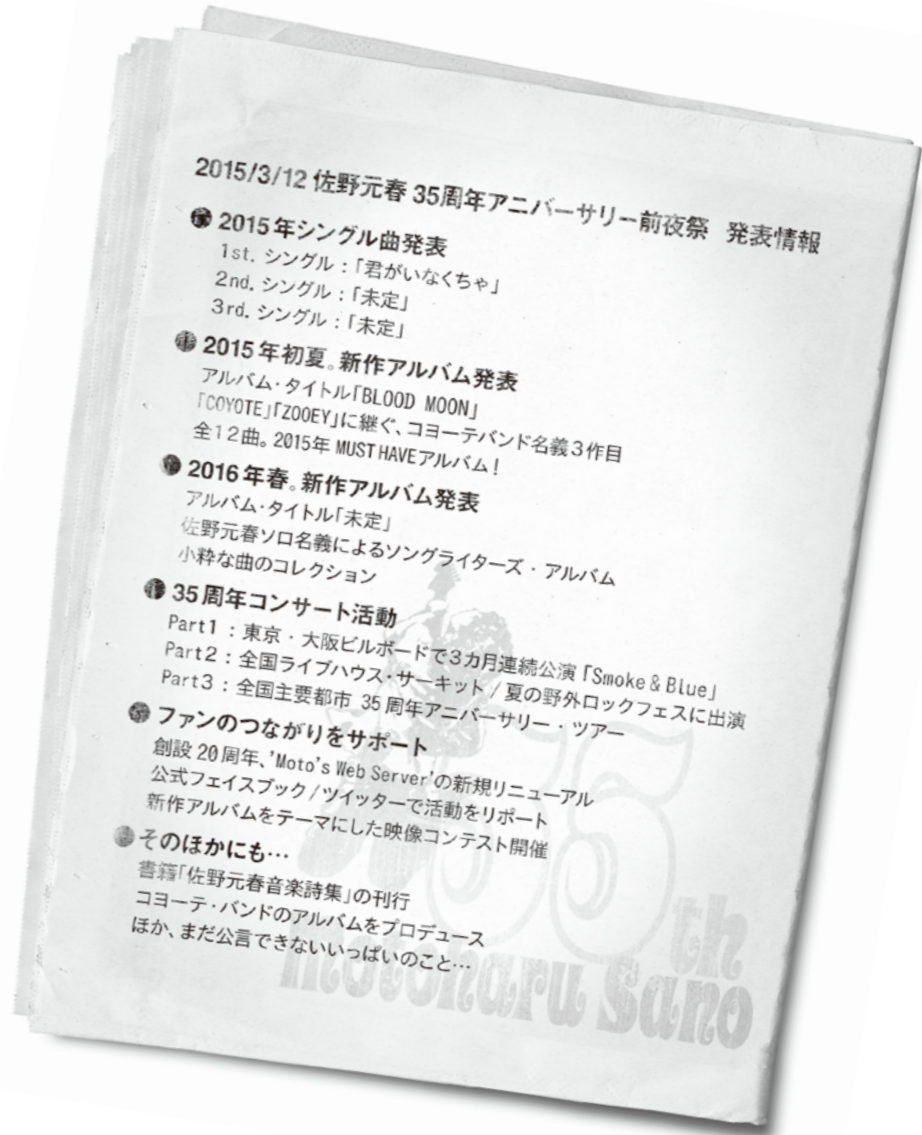
これまで10周年、20周年、30周年と喜びを分かち合ってきたことが、35周年、もうそんなに経つなんて、この35年間おられることなく前進し進を照らしてくれた佐野さん同じ時代に生きている幸福に感謝です今年のお腹いっぱいになるくらいのアクシヨンプラン、楽しみが多過ぎて目が眩みそうですね。とにかくひたすらお腹ぼんぼこにします。35周年、みんなで盛り上げましょう！(奥山千亜紀)

佐野さん自身が「コヨーテバンド3部作の完結編」と称する新作アルバム「ブラッドムーン」も楽しみですが、何よりも驚きなのは、来年の春に更に新作をリリースする予定であるということです。このアルバムが発表される頃には佐野さんもおそらく還暦を迎えていますね。ひとつの区切りという意味もあるのかも知れません。そしてぜひ実現して欲しいのは詩集の刊行です。佐野さんのキャリアは今や日本のポップミュージックの大きな文化的財産ですから、詩集にせよ、音楽のパッケージにせよ、しっかりとアーカイブするべきだと思います。(小林史明)

恵比寿での35周年キックオフパーティーは予想以上に楽しいものでした。ライブももちろんですが第二部のトークショウも素晴らしいかったです。ロックミュージシャンと落語家のコラボという前代未聞の企画が実現できるのも常に新しいことに挑戦し続けている佐野さんならではだと思います。新作アルバム以外にも気になる企画が目白押しで楽しみの多い一年になりそうです。(矢島一朗)

今号のインタビューで35周年を機に予定されている企画の数々をお聞きしているときに、ふと30周年のことを思い出していました。それも順調に進んでいたアニバーサリーツアーのファイナルを飾る東京国際フォーラム公演の前日に起こったあの東日本大震災、それからちょうど100日後に行われた振替公演まで、ドラマの脚本でも書けないような激動の幕切れとなりました。35周年は大きな天災などに見舞われることなく、予定されるすべての企画、ライブが無事に行われることを願うばかりです。(山田和史)

写真／エムズファクトリー提供



Cappuccino Talk Meeting

ファンクラブと編集部の交流の場である読者投稿コーナー

2014年秋ツアーに参加して

秋ツアーの名古屋、大阪、東京ファイナル2daysに仲間と参加し、「この先へもつとー」とロードで成長を遂げて行くバンドの変貌を体感できました。慈愛と決意に満ちた静と動の曲達！一緒に歌い、ダンスして、ラストはパーティー、パーティー、一体となって厚い演奏を届けてくれた元春とコヨーテ達にたくさん勇気もらいました。そして、何度も叩きのめされて来たけれど、もう一度信じてこの人生をサバイブして行くぞーと胸を張って歩き出しました。ありがとー！元春&コヨーテバンド！(WILDネコ)

11月15日(土) Zep福岡

隣りのヤフオクドームでは「嵐」のコンサートがあり、きらびやかな若い人達の流れと共に、中2の娘と一緒にZep福岡入場の列へ。黄昏時に映えるハードロックカフェを横目にテンションが上がる。

正直、隣りのドームにも負けてないくらい、盛り上がりました。初っぱなからアクセル全開！娘も言っていたけど、最初に「ナレオンフィッシュ」が出るとは思わなかったからびくり！娘も興奮していました。私的に印象に残った曲は「U.S.」。「ポーラスター」「約束の橋」「ポヘミアン・グレイブヤードです。」「食事とヘッド」もかな。

特に「ポヘミアン・グレイブヤード」は「Sweet 16」からの曲。このアルバムが出た当初は元春さんの全アルバムの中で一番好きなアルバムでした。

現在45歳の私が25歳頃に買ったツアー、「See Far Miles Tour Part 1」「Part 2」辛い仕事を切り上げて、会場福岡サンパレスまで徒歩20分、息を切らせながら嬉しくて小走りきみで向った寒い冬の大通通りを思い出しました。一瞬であの時あのツアーの記憶が蘇った嬉しかったな。まさか、このタイミングで出てくるとは！元春さん、有難うございます！

つい最近、書籍「立教大学 by AREA」を買って、周防正行監督との対談を読みました。立教大学に入った理由、お二人の意外な接点、先生のお話「制作者として、筋を通すこと、面白かったです。」

そして、これまた先週、朝日新聞土曜版「be」に周防監督の映画が紹介されて、て、AREAの話と合わせて娘に話すと、「青のbeの人の話、知ってる！佐野さんと同じ大学だったなんて！映画も見てみたい」と好反応、中2になる

と、少しずつ興味も広がり反応してくれる事が嬉しく思います。

実は、Zep福岡の会場では、何組もの親子連れを見ました。会場場では私達は自転車で行ったのですが、途中で追い抜いた小2〜3年生の男の子を連れて来た父が、佐野さんの会場にいた事や、小学高学年の女の子も何人かいました。父が子が多かったかな。昨日の佐野さんは御機嫌で、MCも長く、ユーモアに溢れていました。大学講師の面を垣間見ましたがしまし、M・P・ビーンの様

様に笑わせてくれました。

「男は目の前に山があつたら、それに登るんだ。だけど女性は山をよけて、その先の大地をどんどん進んでいく。僕はその事に3年前に初めて気付いた」
「嬉しいの先にあるのは暴力」「この頃の曲が知りたい人は後ろでCDを売っているから笑)」

改めて、佐野さんカッコイイ！そして若いコヨーテバンドのメンバーもエンターテイメント性を備えていて、優しさを感じます。ありがとー、佐野さん。ありがとー、コヨーテバンド！(猿渡裕子)

編：秋ツアー、素晴らしいかったですね。今号のインタビューからも元春のザ・コヨーテ・バンドとのコラボレーションに対する確かな手ごたえと自信を垣間見ることが出来ますね。